

第287回くらしの植物苑観察会 令和5年2月25日(土)

「西洋草花模様の着物」

澤田 和人(当館 情報資料研究系 准教授)

はじめに

近代に入って西洋から新たに輸入されて普及した花々(西洋草花)が、いかに着物の模様に取り入れられるようになったのかを、当時の流行を牽引した三越のPR誌を主たる手がかりとし、見ていきます。

最初の大流行

1903(明治36)年11月、三越は「早稲田の薫」と銘打つ新製品を売り出しました。それは、大隈重信邸の温室で栽培していた洋蘭を写生し、友禅染できわめて写実的に染めあらかした着尺とビロード地の絵画でした。下絵を描いたのは京都の日本画家の平田秋穂、実際の製品をつくったのは京都の有力な染織業者の千總(ちそう)でした。「早稲田の薫」という商品名は、当時の大隈重信邸の温室の所在地にちなんでいます。

政治家として、また教育者として著名な大隈重信は、熱心な園芸愛好者でもありました。盆栽、東西の蘭、菊、仏手柑、メロンなど、大隈重信が情熱を傾けた植物は多岐にわたります。1898(明治31)年には早稲田の自邸に温室を完成させ、そこでは洋蘭を中心に、ヤシやグロキシニア、シクラメンなども栽培していました。

三越が大隈邸の温室の洋蘭に注目したのは、1903(明治36)年3月1日から7月31日にかけて大阪の天王寺で開催された第5回内国勸業博覧会が大きなきっかけとなったと考えられます。この博覧会では、植物温室が建てられ、洋蘭を始めとする植物が出品されました。大隈重信はそのうちの有力な出品者の一人でした。そして、大隈重信邸の温室は、にわかに脚光をあびることとなります。

そこに目をつけたのが三越でした。その目論見はうまくいき、「早稲田の薫」は大いに人気を呼びました。皇后までもが自ら選定して購入したこともあり、「早稲田の薫」は三越自慢の逸品となります。この「早稲田の薫」の流行は、1905(明治38)年まで続きました。



早稲田の薫 千總蔵

(歴博『身体をめぐる商品史』より)

二度目の大流行

その後も小さな流行があつて一時期盛んになりかけても、西洋趣味の折衷は一般には歓迎されにくく、西洋草花模様の広範への普及と定着は未だ果たせていませんでした。

そうした状況を変えたのが、1919（大正8）年頃からの流行です。『三越』第9巻第2号（1919年2月）所載の「西洋草花と本年の流行」と題する記事には、「西洋草花も相当に行はれて居りましたがそれは奇抜なものとして一分の方に喜ばれて居りますだけで、まだこれが模様の流行の中心と云ふ事は出来ませんでした。所が今度は、それが広まりまして、着物にも帯にも、友禅にも、半襟にも応用される勢を示して参りましたので御座います。」とあります。

三越でまず大々的に売り出したのは、各国の国花にちなんだ片側帯（表裏で異なる生地を合わせて仕立てた帯）でした。このような各国の花模様を売り出したのは、「一つは今回の平和を記念し」と述べているように（『三越』第9巻第3号、1919年3月）、第一次世界大戦の終戦を記念する意味もありました。

それだけでなく、1917（大正6）年に『西洋草花図譜』が刊行されたことが、大きなきっかけとなったと考えられます。当時の植物図譜は、通例、標本的に描かれているのに対し、本書はいきいきと闊達に描いている点に大きな特徴があります。その絵を描いたのは、大阪の図案家の谷上広南でした。はじめから工芸品の図案の絵手本として利用されることを期待して出版されたものであり、実際、本書がもととなった着物の意匠が見られます。



西洋草花図譜 国立国会図書館蔵



左の図をもとにした着物の意匠 個人蔵

以上のような経緯をたどり、西洋草花の様子は着物に普及していき、同時に西洋趣味の意匠も定着することとなります。西洋草花模様は、着物の意匠がより一層豊かさを増すことに大きく貢献したと言えるでしょう。

.....

次回予告 第288回くらしの植物苑観察会 令和5年3月25日（土）

「古代の桜」

仁藤 敦史（当館 歴史研究系 教授）

13:30~15:30 苑内休憩所集合 申込不要 定員30名